食欲不振傾向を示した思春期女子の一症例

——描画・箱庭に表現された自己イメージを中心に——

研究第6部　権平俊子・神田久男

I　はじめに

思春期は，子どもが身体的，精神的，それに社会的にも急激な変化，成長を遂げながら，成人となるまでの中間的な段階であり，その過程においては登校拒否や非行などさまざまな病理現象が発現しやすいといわれている。ここでとりあげる症例は，児童期から思春期にはいりかけた食欲不振傾向を示す11歳の少女である。ただ食欲不振といっても，ここ十数年精神医学や臨床心理の世界で，1つのトピックになっているいわゆる Anorexia Nervosa（神経性食思不振症）とは一概には言い難いが，そこには思春期に特有の問題が多く含まれていると思う。そこで本症では，親との心理的依存関係から次第に自我に目ざめ，家族からの心理的離乳を果たし，さらには朋友との人間関係を通して成長していく過程を，本児との治療過程で描画や箱庭に表現された自己イメージを中心に考えてみる。

II　症　例

クライエント：M子。11歳（小学6年生）

主訴：食欲がない。ときに吐気，胸痛，腰痛を訴える。

普通出産，発育順調で特記すべき既往歴はない。幼児期からおとなしく，偏食がちで，ものごとに敏感なところがみられた。小学校にあがってからは自分から人に話しかけたり，外で友達と遊びまわるといったことは苦手で，親友も少なく，積極性・協調性に欠ける面は現在もみられるが，これといった問題は認められない。学校では軽い貧血を起こしたり，気分が悪いといっては保健室で寝ていることがよくあるという。成績はクラスの中位。

最近，特に思い当たる理由もないのに，食欲の減退が目立ってきた。食べても，食物が喉につかえるのが心配で，ドロドロになるまでゆっくり噛みくだいている。とくに朝は食が進まず，「学校の給食が食べられなかったらどうしよう」「朝食べられないから，学校で走れない」と涙を流すことさえある。同時に，吐気や腰痛を訴えることが多く，湿疹もでるという。体重は36kg（身長153cm）にまで減少するが，本人はそのことをあまり気にしている様子はない。先日も風邪で高熱を出し，学校を3日間休んだ。その時も食欲がない，喉につかえるといって，ほとんど食事をとらなかった。母親はM子の風邪と食欲不振を心配して愛育病院の小児科を受診し，心理治療にまわされてきた。

小児科を受診してから，心理治療のインテークの日までの一週間の間に，一つの出来事が起きた。M子は大きなアメ玉をなめていたが，突然それが喉につかえ，息ができずにとても苦しんだのである。幸いその時は大事にいたらず，アメ玉はすぐにとれた。しかし，M子がいつまでも喉の痛みを訴えるため，某大学病院につれていき診察してもらい，そこでは簡単な処置を受けただけで帰された。ところが，帰り道，M子は依然として「喉が痛い」「喉が渇く」といって騒いだのである。母親はそれをM子の甘えと判断し，あまり甘やかすと癖になる，もう，これくらいのことは我慢できなければいけないと考え，そのことには取合わずバスに乗って帰宅したという。

家族：両親，兄(中3)，弟(小3)，本児の5人家族。父親は自宅で機械販売の会社を経営し，母親は事務手伝いをしている。兄弟は共に学校の成績が優秀で，母親はそのことに満足し，また自慢でもある。しかし，その期待はそのまま本児にも向けられ，有名私立中学に合格させるべく，2人の家庭教師をつけ塾にも通わせている。母親は子どもの教育には熱心で，そのための労力は惜しまない。しかし反面，一人一人の子どもの個性を認め，子どもが伝達し表現しようとする真の意味についてはあまり敏感とはいえない。ことに子どもの示す甘えや依存性に対して，それを共感的に受けとめることはそれほど得意ではないように思われる。M子の食欲が減退し身体が衰弱するのを心配はしても，子どもの好きな消化のよい食べ物を特別にこしらえてあげるような配慮はせず，

夕食などはむしろ外食をする機会が以前にも増して多くなった。というのは，外食の方が自分が作るよりもおいしくM子の食が進むと考えたのである。ところが実際は母親が思うほど食欲が出ず，かえって苛立って彼女に当たる結果に終ってしまう。父親は子どもへの理解はある程度示し，子どもに対する母親の無理な要求をたしなめることはあっても，子どもと直接交わりをもつことはあまりしない。

以下の治療過程は，主に子どもとの治療の展開を中心に記述する。尚，本児の治療は神田が担当し，母親とのカウンセリングは隔週で権平が担当した。

Ⅲ．治療過程

第1回

顔は日焼けして，思ったより元気そう。痩せてはいるが，わりとしっかりした身体つきをしている。はじめのうち，極めて不安げでときどき上眼づかいに治療者の方を見たかと思うと，ときに一点を凝視し，何かひどく思いつめたような眼をするときがある。非常に緊張しているのか，終始手で身体のどこかをこするようにさわり，なんとも落ちつかない様子。家族や学校のことを聞いても，「はい」「いいえ」と紋切型の答えしか返ってこない。「お母さんにここにつれてこられて，なんか戸惑ってる感じ？」と言うと，初めてニコッとうなづく。それでもしだいに慣れてきたのか，表情に生気が甦り，手芸が好きだとか，塾に通っていることなど，当たり障りのないことには短く礼儀正しく話すようになる。初回面接終了後，母親の腕にしがみつくようにして帰っていく姿は，印象的であった。

M子の最初の印象としては，自分に自信が持てずオドオドしていて，無力感さえ抱いていることがうかがわれた。みんなから劣っているのではないか，人前で失敗するのではないかと用心深くなるあまり，行動が抑制的になるばかりでなく，周囲からの働きかけにも無関心，無気力を装うことで，傷つきやすい自尊心をかろうじて維持しているように思われる。また，表面的には表情に乏しく，言動は一見従順であるが，ときおり見せるじっと耐えているような厳しい表情やぶっきらぼうな受け答えから，内面的に深く攻撃性や敵意が潜んでいるようにも感じられた。M子にとって，この治療の場を，誰からも侵害されない安全な場であると感じ，素直に感情が表現できるようになることが，なによりもまず大切であると考えた。

第2回

前回の緊張ぶりとは打って変わり，最初から笑顔をみせて入室する。だいぶリラックスしている。机の上の画用紙に眼をやるので，「何か描く？」と聞くと，黙って鉛筆をとるが，そのまましばらく考えこんでいる。「何を描こうかわからない」と言うので，好きなように人を描いてみたらと促すと，一気に描きあげる(第Ⅰ図)。顔は笑ってはいるものの，相当緊張した身体と大きく見開いた眼が特徴的。最近のマンガの影響もあろうが，それにしても，まわりのものに対する強い警戒心や脅えを抱いていることが，その見開いた眼からとくに印象づけられた。いつも人間はこのように描くという。

第Ⅰ図

今度は，部屋の片隅に置いてある箱庭の用具に興味を示し，不思議そうに見ている。やり方を簡単に説明すると，やってみたいという。まず両手で砂をすくい，しばらくその感触を味わうかのように手のひらで砂をもんでから箱庭の中央下に砂を集めて台地をつくり馬を置いていく。「みんなが食べられてしまうかも知れないから」と言いながら，中央上のライオンと象には柵で厳重に囲いをしてしまう。左上には2本の木と子やぎが1匹いる。柵のかわりに指で砂に線を引き，全体を7つの領域に分割し，そのそれぞれにほぼ同種の動物をならべ，全部で50～60頭と，用意してあった動物ばかり，そのほとんどを使って箱庭いっぱいに敷き詰める(第Ⅱ図)。動物はみな柵の中にきっちりと押し込められ，どうにも身動きができないばかりか相互の交流もなく，ダイナミックな動きに欠ける箱庭になっている。自分は木の下の子やぎで，強い動物に食べられそうで恐いけれども，すべてに柵がしてあるから安全だという。柵の中の恐しい動物たちは，M子に向かって侵害的に押し寄せてくる外界なのであろうか，それとも，彼女自身が抑制して抱いている諸々の欲求や衝動なのかもしれない。動物のうち，ゴ

ム製のヘビ，クモ，ムカデだけは初めから気味悪がって使わず，棒で棚の隅に押しやる。「そういうの嫌い？」と聞くと，「ウン，汚いし気持悪いからイヤ！」と，何か得体が知れず，汚れて無気味なものへの忌避感情を示す。

第Ⅱ図

第3回

箱庭を20分かけてつくりあげる。構造的には前回とそれほど変化はない。ただ，使用した動物の数がいくぶん減り，スペースに余裕があるのと，“柵”のつもりで砂に引かれた線が，途中から“道”に変わっている。だが，動物は決して他の領域には出ていかないという。「このサル，木に登れるかしら」と言いながら，大事そうに木の一番上にのせる。「サル好きみたいだね」と言うと，「そう，だって私の年ですもの。これ私なの。ここから動物たちを見てるの」とうれしそう。柵が道に変わり，全体が開放に向かって徐々に動きだすと，その流れには乗れず，木の上に身を退いてそれを眺めているサルの姿は，心に確かな拠りどころをもたないM子そのままのような情景である。

後半は話しをする。家では少女マンガを読むのが好きで，兄弟とはあまり遊ばない。学校の友達とは休み時間に話しをする程度で，放課後どこかに遊びに行ったりする親友はいない。来年は私立の中学校に進学したい。そのため，週のうち3日間は家庭教師が家に来て勉強，日曜日も塾に通っているとのこと。「それじゃ，遊ぶ時間がないね。つまらなくない」と言うと，一瞬キッとした顔をして，黙って答えない。毎日が勉強に追いたてられる生活への不平・不満や，いつも口でばかり指図する母親に対する感情に焦点を当てるべく，内容が深まらずやや焦りを感じていた治療者の問いかけに，沈黙してそのことに触れるのを避けている様子である。現段階では自分の内面を直視するのはやや時期尚早で無理があった。今はただなんとなく毎日が重苦しく，ただなんとなく毎日が心細く不安なのであって，怒りや憎しみの感情をはっきり意識してしまうことは，かえって混乱さえ引き起こしかねない。今の彼女にとって，むしろ周囲の大人，特に母親の枠組（スケジュール）にそって行動している方が楽であり，安全でもあるわけである。

第4回

箱庭で，今回もまず砂に道を引き，全体をいくつかの領域に仕切った中に動物をひととおり並べる。依然としてライオンと象だけは柵の中にいる。それが終わると作品をしばらく眺めていた。すると今度は，ちょうど箱庭の中央に置いてあった数頭の馬を取り除き，そこの砂を掘って池をつくる。さらに，池から流れ出た水は，小川となって四方に流れはじめ，すべての動物はこの池や小川にやって来て，水を飲んだり，水遊びを始める。いつの間にか道は消え，木のてっぺんに登ったサルだけがこの光景を見ている。荒涼とした砂漠の中に出現したオアシスのように，生命の泉がジワジワと湧いて出て，M子の心と身体を潤し，それがエネルギーとなって躍動を始めていることが，ある種の感動をもって感じられた。

第5回～7回

この頃より，母親のカウンセリングのない時は，一人で来所できるようになる。5回目の面接で，入室すると今日は箱庭ではなく，トランプでスピード・ゲームをしようという。自らゲームの仕方とルールを説明し，始めるが，治療者にとって初めてのゲームのため，いくらやっても勝つコツがうまくつかめずM子の連勝が続く。そんなときは，「ヤッタ！　ヤッタ！」と得意気にはしやぎ，意気揚々と帰っていく。

次の回も当然のごとくスピード・ゲームに興じる。「はやくやろう」と治療者を促し，わざわざ治療者のとなりに席を移して座る。依然としてM子の優勢は続いているが，ときに治療者が勝つと，意気消沈してはいるものの表情にはあらわさない。「やっと勝てたね」と言っても，表情を押し殺した調子でそのことには無関心を装い，何の反応も返ってこない。おしいところで負けそうになったときなどは，そのときだけ自分の都合のいいようにルールを強引に変更してしまうM子には，いたく困惑させられた。勝敗にこだわって負けたくないというよりも，負けることだけは嫌だといった様子である。優越・成功はあたりまえのこととして受け容れるが敗北や失敗は容易には認められず，あってはならぬことなのであろう。勝ちや成功は，まわりの人からの賞賛を意味するというより，叱責や非難を回避できるという，そうした意味合が強いと思われる。

7回目も，前回負けたことなどまったく気にしていないかのように，明るく屈託がない。このスピード・ゲー

ムという遊びは，数合せをして，相手より早く自分の持ちカードを全部捨てるのを競うゲームである。ゲーム回数が進むにつれ，M子は徐々にではあるが負けたくやしさを表現し，さらに再挑戦を試みるようにさえなってきた。そこで，ここではもうM子と治療者が互いに勝敗を競っても，恐らく途中で勝負を放棄することなく，耐えられるであろうと判断されたし，またそのことが必要であると考えたので，治療者も奮起し勝率を5分5分のところまで挽回していった。案の定，M子も負けまいとしてますます一生懸命になっている。ところがゲーム中，真剣さのあまりM子はカードを1枚机の下に落としてしまう。それにはおかまいなしに，治療者は自分のカードを捨てていると，突然「先生ズルイ！　先にやっちゃダメ！」と真顔で怒った。一瞬おいて，ふとすごい剣幕で怒鳴った自分の姿に気づいたのか，あるいはまた，以前に何回か治療者がカードを落としても，斟酌なくその機をついて一方的に勝ちを収めた時のことを思い出したのか，今度は治療者と視線が合うとプーと吹き出し，「ごめんなさい」と首をすくめて照れ笑いをする。M子は図らずも，みずからの激しい生の感情を露呈することになった。ところが実際体験してみると，それは必ずしも抑えるべきものではなく，また誰からも咎められることでもない。このことを契機に，彼女の身体からもう一つ緊張がとれ，穏やかな表情をするようになったと感じられた。それは治療者も同様で，それまでどこか腫れものにさわるように，もう一歩彼女の内面に踏み込めないでいたためらいが，かなり解消されたのは確かである。

ここでゲームをやめ，とぎれとぎれではあるが，自分のことについて語り始める。国語は得意だが，算数は苦手。とくに体育は自信がない。走るといつもビリになるので悲しい。父親は仕事が忙しく，家にいてもあまり話しをしないという。そんな会話の中で，しばらく沈黙が続き，何かを言い出しかねている。

そして……

M　子「あのときのことね……」

治療者「あのときって？」

M　子「ほら，病院にいったとき」

治療者「アー，あめ玉が喉につかえて，病院でみてもらったときのことね」

M　子「ウン，ザラメで喉に傷ができているような感じがして。帰りもまだ痛かったの。（ウン）でもお母さん，なんでもないっていうし……」

治療者「本当にまだ喉が痛かったんだけど，お母さん気にとめてくれないから，よけい心配になっちゃった」

M　子「そう。……あれから食べるのなんだか恐いの」

治療者「食べでて，のみこもうとするとき，また喉につかえそうで恐い」

M　子「ウン」

それまで一度も触れたことのないあの出来事について，自ら初めて語った。M子は喉が痛いのを訴えたかったのではない。喉につかえ，息もできずに苦しんだそのときの恐ろしさ，心細さを母親にわかってもらいたかった，保護してほしかったのである。本当は病院など，どうでもよかったのかもしれない。今度喉につかえたら，いったい誰が助けてくれるのだろうか。食物がなかなか喉を通らないのは，“のみこむ”ことへの恐れであり，また，拒否でもあろう。

第8回

移動教室で日光に2泊3日いってきた。昼はボートに乗ったり，サイクリングをしたりで楽しい毎日。夜は夜で，先生の眼をかすめて，朝まで話しこんでいた。先生に見つからないようにするには，“特別の技術”が必要だという。また，そこでは親友が2人もできたと，それまでとは違って自然な活き活きとした調子でしゃべる。

箱庭では，「今日はみんな放し飼い」と柵は一切使用しない。真中の湖を中心に，砂の上に木の葉を敷きつめて草原にし，そこに馬や牛，それにライオンや象までが放牧されている。あれほど嫌がっていたクモ，ヘビ，ムカデもなんなく素手でつかみ，箱庭の中に入れた。もう，弱いものを殺して食べてしまう動物，気味悪い汚い動物は柵に押しとどめておくほど，脅威には感じられなくなったのではなかろうか。

第9回～11回

スピード・ゲームはもう飽きてしまったといい，ミニチュアのボーリングをやりたがる。これは遊び方がやや難しく，はじめのうちはピンが1本しか倒れなかったり，ボールが溝に落ちたりで，なかなかうまくいかない。治療者に一度やるように要求し，1回ですべてのピンが倒れると，「すごい！」と言って歓声をあげる。再び自分でボーリングに挑戦するが，どうしても得点が伸びない。だからといって，途中でゲームを投げ出すような素振りは見せず，ボールを投げるコースや角度を変えたりして，高い得点をあげるようにいろいろ工夫している。そのうち，画用紙に得点表を書き，M子の劣勢は承知の上で治療者に勝負を挑んでくる。やはりM子の劣勢は続くが，「残念，また負けたか。でもそのうちに絶対に勝ってみせるからね」とファイトをむき出しに表現する。勝敗を競い，勝とうと努力するが，もう負けること

へのこだわりはほとんど見られない。真にゲームを楽しんでいる。

こうして以後数回のセラピーでは，何種類かのゲームを中心に進められていくことになる。いくつかあるゲームの中から次に選ぶものは，決まって内容がより複雑で勝つためには工夫が必要であり，しかも以前に遊んだことのない初めてのゲームをとり出してくる。これまでの画一的な狭い行動の枠から離れ，失敗を恐れず新しい体験に立ち向かおうとする並々ならぬ意欲が伺えた。

第12回

夏休みも終わり，今週から2学期が始まる。母親の田舎では，山でセミや甲虫を採ったり，海できれいな貝殻やカニをつかまえたりした。日本海は水が冷たく，クラゲにさされて痛かったという。そのほか，プールに行ったことなど，夏休みの出来事を1時間夢中で話し続けた。

第13回

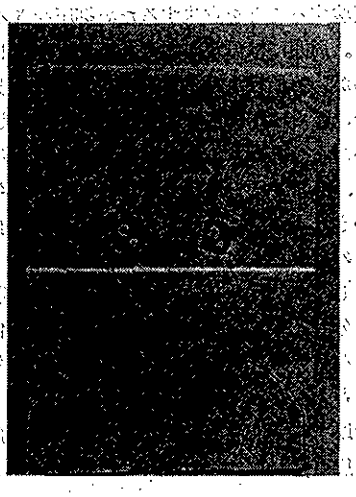
新学期が始まって2週間，学校生活も軌道にのりだした。学校で友達とマンガを回し読みしたり，知らない手芸の方法を教えてもらい，今それに凝っている。この前は宿題を忘れたので，授業中にこっそり友達のノートを借りて写した。とてもスリルがあった。学校は友達がいっぱいいて楽しい。それにひきかえ，塾はつまらない。やっぱり日曜日は遊びたいから。家庭教師と勉強していても，いつも問題集ばかりやらされて嫌になってしまう。お母さんは少しでも勉強しないと怒るし，あれこれと何かにつけてロうるさいという。このように，毎日の日課になっている塾や勉強，それに母親について否定的な感情を明確に表現したのは，この時が最初である。今では体重が42kgにまで増えているという。

M子の成長は箱庭にも顕著に反映されている。それまでの動物ばかりの世界に，初めて家と少女の人形が登場してくる。少女は動物にまじってブランコに乗って遊んでいる。子犬が少女の足にからみつき，その光景を遠くから大人の男性が眺めている。M子の分身と思われる白クマ（M子はこの白クマが自分だという）は箱庭を縦横に悠然と歩きまわり，少女はライオンや象，それにヘビやムカデまでと一緒に，同じ世界の中で楽しく共存しているのである。

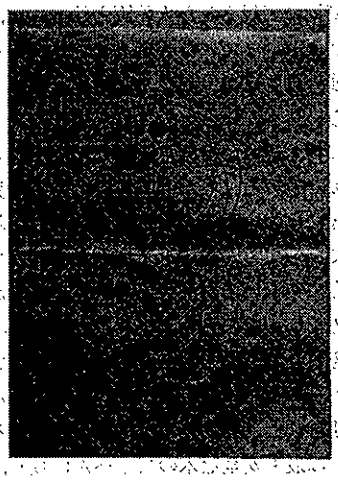
第14回（最終回）

「先生，私変わったね。（ソウ）だって身体に元気がでてきて，みんなと走ったりできるようになったんだもの」と生命力が解放され，現実にたち向かおうとする意欲を実感している。入室する前から予定していたかのように，治療者に画用紙と鉛筆を要求して，自ら人物画を描き始める（第Ⅲ図）。やはり眼は大きいが，髪はこざっぱりと三つ編みにし，顔の表情はとても穏やか。肩から余分な力がぬけ，大分リラックスしている。2枚目の画用紙には，“ドラえもん”のマンガを描き，それを治療者へのプレゼントだといってわたしてくれた（第Ⅳ図）。宇宙からやって来た超能力をもつドラえもんは，冒険好きでいつも人のために世話をやくが，なぜかドジってばかりいる。しかし，それにもめげず，やさしい心で自由奔放に活躍するドラえもんの姿は，再び躍動し始めているM子の内的世界と二重写しになり，自分の欠点や弱さをも認められるだけの柔軟性と力強さが確実に芽ばえているように感じられた。

第Ⅲ図



第Ⅳ図



Ⅳ 考 察

M子は母親に対していつも素直で従順な子どもであっ

た。母親の言いつけに従い，母親の過大な期待を裏切らない“良い子”になることが自分の成すべきことだと感じていた。自分の依り拠となる枠組を母親に求め，あたかもそれが自分自身であるかのごとく振る舞い，感じるときにこそ安定が保たれている。しかし，そこにあるのは親の判断やおしつけによって機械的に行動している仮の自分にすぎない。この虚構の自分と実際の自分との間には常に矛盾が存在し，彼女は劣等感に悩まされ自分自身をも軽蔑しなければならなくなる。しかもなおかつ心の底では，ひそかに虚構の自分を信じ，それにしがみつこうとするため混乱は一層増大する。だからといって，視点を現実にすえ，同一視した母親に不満や懐疑を抱き，ましてや自らの欲求や衝動を意識することは，この安定が崩壊することを意味するため抑圧せざるをえないのである。周囲には母親の期待を難無く実現している優秀な兄弟がいる。親からの賞賛の基準はこの兄弟にあり，M子は彼らに圧倒され競争心や嫉妬を感じていたのではないだろうか。しかも，母親は子どもの欲求や感情に対して，あまりにも無頓着であった。子どもに気をつかい，いきとどいた世話はできても，それが子どもの心の中からの欲求とは明らかにかみ合っていない。こうしてM子はしだいに自分を「人に好かれない自分，弱くて駄目な自分」と感じ始め，愛情・依存欲求の不充足感をつのらせながら，行動にも生彩を欠き，消極的になっていったと考えられる。

そこで以下に，描画や箱庭に表現されたM子の自己イメージに焦点を絞って，治療過程の流れを追ってみることにする。

治療の初期に表現された人物画と箱庭には，当時のM子の姿が痛々しいまでに浮き彫りにされている。まわりはすべて強い動物ばかり。そんな中に子やぎが一頭で出ていったらいっぺんに食い殺されてしまう。そこで動物を柵の中に押し込み，自分も防御柵の中でなら安心して憩うことができる。しかし，注意は常に外界に向けられ，心の底には強い不安と緊張が潜む。この状態で新しい場に出ていっても，熱中して楽しむことはできない。自分は本当に楽しいのか，恐いのか，辛いのかさえはっきりつかめない。そのうち，少なくとも治療場面だけはそれほど恐れたり，緊張したりする必要のない所であることがわかってきた。柵が道に変わり，地中から泉が湧き出て大地を潤し，動物たちは活動を開始する。だが自分（サル）は最も安全な木のてっぺんに登り，この光景をある種の期待をもって，反面，醒めた眼で眺めているだけである。M子はよく無関心，無感動な表情をすることがある。恐らくそんなときは外界を，あるいは自分自身を冷たく引き離し，自己疎外を起こしているときであろう。

やがて，M子は木の上から地面に降りてきて，決して負けるはずのない一番得意なゲームを始める。ゲームの主導権を一手に握り，ときには都合のいいようにルールを変えたりして連勝につぐ連勝。このように彼女は治療者との暖かい友好的な関係の中で，得意になったり，わがままを言っては甘えたりして振る舞うようになるが，これはある意味では明らかに退行現象といえる。治療の初期の段階で，M子の内面に直接アプローチするにはやや荷が勝ち過ぎると思われた。そこで，暖かい保護された状況で，治療者との人間関係を通して甘え，依存するという，これまで求めても満たされなかった感情を埋めることは大切ではあるが，ともするとこれは，クライエントが治療場面を単に退行して，満たされぬ欲求を充足させる場としてのみ認知し，そうした人間関係が延々と続いて，結局は治療を長びかせてしまう危険性をはらんでいる。そこで治療者は，本来のルールに戻ってゲームを進めることを提案し，勝敗を5分5分まで挽回して，現実の世界に根をおろすよう意図した。ところが，幸いにも当時M子は学校生活においても，朋友との親密な人間関係を体験することができたのである。移動教室で，夜中1つの布団に3人でもぐり込み，先生の眼をかすめては，身体を寄せ合いながら朝までふざけたり楽しく語り合ったりした。M子にとって同年輩の友人とのこれほど親しい交流は初めてであろう。ここで3人はすっかり意気投合し，親友としていつも行動を共にするようになった。3人が集まると親しく話したり，元気に走りまわったりする。時には仲違いのケンカもするし，テストの成績を互いに比べたりもする。こうしてM子は親友というより好ましい同一視の対象を得ることにより，年齢相応の少女としての自己同一性をわずかながらでも再形成することが可能になったと考えられる。

9回目からのゲームはそれまでのゲームとは意味が異なる。そこには以前のような退行のニュアンスは感じられない。むしろ自立であり，主体性の発現といえよう。初めてのゲームに興じ，しかも周囲にはその楽しさを共有できる朋友がいる。防衛的構えは，現実に直面することを避けさせるだけでなく，多かれ少なかれ，現実認識を拒否することにもつらなる。しかし，退行から脱却し，自らの意志でより自律的に行動できるようになれば，新しいことを体験しても，それをそのまま受け容れ我を忘れて熱中することができよう。

箱庭にも人間が2人登場した。柵のない広い土地であらゆる動物と一緒になって遊ぶ少女の姿から，M子は自

分自身に対して肯定的な感情を抱くことができるようになり，自らの内にある敵意や攻撃性という，それまで認めることができなかったネガティブな感情も自己親和的なものとして，感じ始めていることがうかがえる。子やぎやサルに比べ，白クマははるかに力強く頼もしい。少女マンガばかり好んで読んでいた子が，テレビのドラえもんをおもしろいと感じ，笑いころげて見ている。なんとも無邪気でこだわりがない。こうして人間の内的な成長の力が解放されると，自由な精神運動の発露に伴って，自然で建設的な態度はおのずから生まれてくるものである。

治療を終結してから1年が経過している。その間M子は某私立中学に入学し，現在も元気に通学している。当初M子と母親が希望していた中学には入学できなかったが，彼女の学力により適した学校であり，母親も私立中学ということで一応満足している。おそらくM子は中学でも親友をもち，その交友関係を通して成長し，活き活きとした生活を送れるようになると思う。だが，彼女は当面のひと山を今なんとか越えたばかりであり，これから迎える思春期，青年期にもまだまだ多くの越えるべき山が存在することも事実である。

〔参　考　文　献〕

大原健士郎・岡堂哲雄編：思春期・青年期の異常心理　新曜社　1980

下坂幸三：神経性無食欲症（青年期やせ症）の精神医学的諸問題　精神医学　5；259.　1963

下坂幸三：青春期神経性食欲不振症の心因に照らして　精神医学　9；393　1967

詫摩武俊他：思春期の心理　有斐閣新書　1978